

週刊粧業 顧問 加藤英夫(週刊粧業 流通ジャーナル 前会長)

流通記者50年「経営トップとの交流の中で」

第16回「テスコに学ぶ」
(マルエツ 吉野平八郎 元社長)

吉野さんのこの要請で、テスコを中心とした視察スケジュールを組み、アポイントを取った。流通ジャーナルはその当時、アメリカ視察セミナーに加え、ヨーロッパ視察セミナ

ンビニエンス
トアの「テスコ
エクスプレス」
の5つを主力業
態として展開し
ていた。

なかでも吉野
さんが関心を寄



ご案内したマルエツ幹部の皆さんと
中央が吉野社長、その右が高橋恵三氏

氏もこの中にいた。

「加藤さん、一度我々をヨーロッパにご案内願えませんか。とくにイギリスのテスコに興味をもっているんですよ」

トの「テスコ エクス
トラ」、スーパースト
ア、スーパーマーケッ
トの「テスコ」、都市
型スーパーマー
ケットの「テス
コメトロ」、コ
察した。テスコの大き
な特徴は、50%を超え
るオウンブランド（P
B）比率の高さである。

八郎社長をはじめ同社幹部6名をヨーロッパの流通視察にお連れした。後に社長となる経営企画担当の高橋恵三

テスコがまた日本に進出する前で、イギリス最大の小売業として業績も非常に好調だった。ハイパーマーケット

テスコの本部で同社幹部から詳しい説明を受け、その後、代表的な店舗を紹介され、バックヤードを含めて視

サッカーのワールド
カップを日本と韓国が
同時開催した2002
年、マルエツの吉野平

1も年に1、2回開催していた。今回はそのマルエツ特別版というわけである。

せていたのが「テスコメトロ」「テスコエクスプレス」の小型2業態だった。

毛髪再生医療による壮年性脱毛症の治療法を開発

資生堂

資生堂

資生堂 再生医療開発室(細胞培養加工等担当)は、東京医科大学皮膚科学分野の坪井良治主任教授と、東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科 新山史朗准教授と共同で、脱毛症や薄毛に悩む人々を対象に、医師主導の臨床研究を行った。その結果、自家毛髪培養細胞を用いた細胞治療法に安全性と改善効果を認め、男女の壮年性脱毛症の新しい治療法になりうることを示した。今後は、再生医療による新しい薄毛治療法の開発に向けた重要な研究成果と位置づけ、臨床研究を推進していく。

現在、脱毛症はいくつかの薬剤等が用指す。

の中でも発症頻度の高い男女の壮年性脱毛症は重篤な疾患ではないが、外見に重大な影響を及ぼすことから、ＱＯＬ向上の観点で治療法開発が期待されている。壮年性脱毛症の治療法として、日本国内でいられているが、継続的な服用が必要であることや、女性の場合は薬剤の選択肢が限られていることなどの課題があり、それらの効果は男女を問わず十分ではなかった。今回の臨床研究では、細胞治療技術の安全性・有効性が確認されたことから、今後、脱毛症や薄毛に悩む幅広い人々に向けた細胞治療法の開発を目的とした細胞治療法の開発を目標とする。

臨床研究では、東京医科大学特定認定再生医療等委員会にて承認された計画に基づき、毛球部生根鞘（ＤＳＣ）細胞加工物（以下、Ｓ－ＤＳＣ）を用いた自家培養細胞の注入施術頭皮薄毛部への注入施術の安全性と有効性の検討を行った。

具体的には、同意を得た被験者の後頭部から少量の皮膚組織（直径数

細胞加工施設（資生堂細胞培養加工センター＝SP EC）に輸送して、毛包DSC組織を単離、培養し、S-DSCを獲得した。

部頭皮の4つの異なる部位に、異なる量のDSC細胞、DSC細胞を含まないプラセボ懸濁液を一回注射し、12カ月後までに総毛髪密度、積算毛髪径、平均毛髪径を測定した。その結果、DSC細胞を注射した部位の総毛髪密度と積算毛髪径は、6カ月後、9カ月後にプラセボと比較して有意に増加した。また、有効性に

自社単独での亜臨界DME抽出技術の開発へ

性差はなく、重大な有害事象も認められなかった。同臨床研究では、S-1は、安全性を確認した。しかし、臨床で実際に治療法として使用するためには、薄毛部全体に複数回投与して、見た目でわかる治療効果と安全性を示す必要があり、そのため臨床研究を今後、実施していくという。

アルビオン

究を行ってきた「亜臨界DME（ジメチルエーテル）抽出技術を用いた化粧品原料抽出技術」について有用性の検証と実用化への見通しが立ったため、共同研究成果としての知的財産権（リコー保有分）を同社より取得したうえで共同研究を発展的に解消し、自社単独での新抽出技術の開発に取り組みことを発表した。

発するDMEの性質により、同抽出物は非加熱での溶媒除去と濃縮が可能となる。

ジメチルエーテル(DME)は、生体毒性が極めて低いガスであり、加圧することで液化し垂臨界状態となる。この垂臨界状態となったDMEは、水と水溶性成分を可溶、脂溶性成分を易溶とするため、この垂臨界DMEを用いて植物の成分抽出を行うと、室温で高効率抽出と比較して植物から化粧品向け高効果成分を抽出するために非常に有

しかも全ての業態で売
玉県で非常に元気のよ
いスーパーマーケット
がある」ということで
JR京浜東北線蔵駅が
各駅停車のように出店
するならば、当社はバ
ネ」

こうした同社の業態戦略をつぶさに視察した吉野社長はじめ同社幹部は帰国後、都市型小型業態の「フーデッ

らほど近い同社本部を訪れた。

プレハブ建ての簡素な本部で快く取材に応じてくれたのが、当時

ス停の数力所おきに出店していきますよ」

マルエツがサンコーを吸収合併した1981年、実兄の高橋八太

クス」の開發に乗り出す。それが現在の「マルエツプチ」に繋がっている。マルエツプチは第2の主力業態として、都内中心部を中心に、買物に不便を

営業本部長の高橋登志雄専務だった。穏やかな感じの人だったが、その腕の太さには驚いた。現場たたき上げだとすぐに分かった。

何回か取材する中

郎社長と意見が分か
れ、結局、登志雄専務
は同社を退社して自分
で「生鮮市場」を始めた。
その後のマルエツ
は、ダイエー、さらに
イオンと提携し、20

感じている人々に支持されている。

マルエツがまだ「有限会社丸悦ストア」だった時代、店数も10店をやや超えた状況の頃、入社間もない駆け出し記者の私は、「増

で、彼の次のような言葉が印象に残っている。当時、西友ストア（現西友）の勢いがよく、西武鉄道沿線を中心に出店を重ねていた。

「西友ストアの出店スピードが速いです

15年には、マルエツ、カスミ、マックスバリュ関東の3社で「ユナイテッドスーパーマーケットホールディングス」を設立して現在に至っている。（次

効であり、植物由来成分抽出の全く新しい技術として実用化の可能性が極めて高いと判断し、2018年4月より共同研究契約を締結。亜臨界DMEを用いた抽出技術の実用化検討、同技術により抽出した成分と従来技術での抽出成分との比較・検証を行ってきた。

その結果、亜臨界DMEを用いた安定的な抽出

ヒトの皮膚から

メナード

生

充教授)と共同で「ヒトラノサイト」の起源と術を確立した。今後、の解明や創薬・基礎研究の皮膚や毛髪の色に影響を与える色素であるメラニンとは、メラノサイトと呼ばれる細胞で作られるが、色素異常が生じる原因の多くはこのメラニンの増加、あるいは減少によるもので、その機序として、メラノサイトによるメラニンの産生量の異常や、メラノサイト自身の増加ないし減少がある。

近年の研究からメラノサイトは、毛穴の毛包部分に存在する色素幹細胞から分化し、表皮に移動してメラニンを作るメラノサイトに成熟することが明らかになっている。

そのため、色素異常の発症メカニズムやその治療法の確立には色素を作るスタート段階である色素幹細胞の解析が重要で、色素幹細胞の研究を進め

メナード

メナード 日本メナード化粧品は、藤田医科大学応用細胞再生医学講座（赤松浩彦教授）、皮膚科学講座（杉浦一充教授）と共同で、ヒトの皮膚からメラニン生成を行っている色素細胞（メラノサイト）の起源となる「色素幹細胞」を効率的に分離・培養する技術を確立した。今後、これまで困難であった色素異常の発症メカニズムの解明や創薬・基礎研究の進展に向けて同技術を応用していく。

ヒトの皮膚から色素幹細胞の分離培養技術を確立

効であり、植物由来成分抽出の全く新しい技術として実用化の可能性が極めて高いと判断し、2018年4月より共同研究契約を締結。亜臨界DM Eを用いた抽出技術の実用化検討、同技術により抽出した成分と従来技術での抽出成分との比較・検証を行ってきた。

その結果、亜臨界DM Eを用いた安定的な抽出技術の確立が成し得たと、研究対象植物の抽出成分比較において、亜臨界DM Eを用いた抽出成分に従来品に対する明らかな優位性が見られたため、アルビオンは同技術を自社の独自技術とすべく、リコーにより取得されていた同技術の知的財産権を同社より有償にて取得。同社との共同研究を発展的に解消し、同技術を自社の独自技術とすべく自社単独で新抽出技術の実用化に向けた研究開発を推進することになった。

今後は、この技術を用いた自社オリジナル化粧品原料の開発と商品への配合を検討していく。また、リコーとアルビオンはさらなる新しい研究テーマを通じた連携や共同研究を検討していく。

従来の方法では、高齢者から分離した細胞では生着率が低く、培養が困難なケースが見られたが、同培養方法を用いると、高齢者から分離した細胞も、安定して培養することができるといふ。

同研究で開発した新しい培養方法と従来の培養方法を比較するため、それぞれの方法で培養した色素幹細胞について、色素幹細胞のマーカーである「FZD4」の発現を指標に細胞の数を比較した。その結果、従来の方法と比較し、新しい培養方法では、色素幹細胞マーカーが約4倍発現しており、効率的に色素幹細胞が分離・培養できてい

**自社製品のコロナウイルス科への
不活化効果を確認**



フマキラー

フマキラー 実施し、自社製品3品には、新型コロナウイルスと認されたことを発表した。今回は、「フマキラー キッチン用アルコール除菌スプレー(アルコール濃度49 v/v%)」「アルコール不活性試験を外部試験 コール除菌プレミアム 3品は、新型コロナウイルスに分類されるネコ腸コロナウイルスは、新型コロナウイルスと同じ構造を有する、脂質二重膜をもつエンベロープウイルス。3品は脂質二重膜を溶解させる

「アルコール不使用」の図について。